

名に高き歌人在原業平のみまかりしはいまだ陽成院の御宇の内なりしこと國史を見て知るをうべし。三大實錄卷三十七、元慶四年五月二十八日の條には、從四位上行右近衛權中將兼美濃權守在原朝臣業平の卒去せしことを記し、つぎてこの朝臣の略傳をも載せたり。在五中將の出生と賜姓のことまた官位累進のさま、この卒傳に明かなれども、この内にまた四字句もて記されたる評語ありて、體貌閑麗、放縱不拘、略無才學、善作倭歌と云へるはいと言少なれどかの中將の人となりといさをしをしながら述べつくせりとおぼゆればわきて心をつけざるべからず。この四字句諸書に引かれたれば知れる人少からざるにや。さはれ略無才學の一句につきては、近き世にいささか難しきあげつらひなきにあらず。

大日本史卷二百十八に載れる在原業平傳のおほかた三大實錄の卒傳によりて記されたることまぎれなし。伊勢物語に説けりしことぐさ、大日本史業平傳には、男の隅田川に至りしことのみを記し、かの名にし負ふ都鳥の歌までは載せたれども、ほかはいささかもここに採らでやみぬるは、かの物語の述ぶる業平とおぼしき昔男の事跡の實錄諸書にたえて見えざるがゆゑなること夾註もてことわりたり。

三大實錄の卒傳の收むる四字句、この大日本史業平傳にも引きたれども、略無才學の一句のみは省きたり。この一句を省きたるはなにゆゑぞと推し測るに、業平朝臣の渤海國使臣を鴻臚館に訪ひしこと三大實錄によりていとしるきがゆゑなるべし。本朝の文藻に富めりし才人の渤海使と詩賦應酬ありしこと語れる文くさぐさあり、才學乏しからむものゝいかで外使接迎の員數に列なれるいはれあらめや、業平朝臣ただ大和歌にのみ秀れたるにはあらで漢才をも具へゐたればこそ外使接迎をことゆゑなく務めはたすをえたりしならめ、されば略無才學の四字、もはら大和歌にて高き名を得たるかの朝臣に漢才まではなかりしなるべしと、外使接迎にいさをありしことにはつゆ考へいたらで、ただひが思ひに思へる後のさかしら人のなせる竄入ならでやはあるべき。大日本史業平傳の記者たれなりしやここに詳かにしがたけれども、たれにてもあれ、略無才學の四文字をその本文に採らでやみにしは、おほかたかくのごとく思ひ測りしがゆゑなりけむとぞおぼゆる。

業平に才學有りしや無かりしや、しかと定めむにさしたるよすがはなけれども、このことにつきて年ごろわが考ふることなきにしもあらねば、そをここにおろる述べくほりするなり。

三大實錄國史大系本には略無才學の無字につきて頭注あり、無或當作有と記せるは、校訂者たりし黑板勝美博士のあるひは大日本史業平傳の記者に習ひたりしゆゑにや、または賀茂眞淵翁の思へるところに従ひたりしゆゑにや、とみには明めがたし。縣居大人の略無才學の四字を實錄本文より省かむとせしにはあらで、ただ略有才學に讀み改めまほしく思へりしこと、この翁の著せる伊勢物語古意惣考によりて知るべし。この文のうちに縣居大人の説かれしおもむき、ひとわたりはさも聞ゆれば、今も諾ふ人少からざるにいたり、高崎正秀博士なほ賀茂翁にくみせられたれども、その考へさらに従ひがたし。三大實錄の古き筆寫本刊本の今の世に残れるものに業平卒傳の中の略無才學の四字を省きたるものは

た無を有に變へたるものさらにあるべしとも思はれねば、ただなほざりの推し測りのみもて、この四字を省きまた改めむこといと妄りなりといはではあるべき。されば略無才學の一句省くべからず、また一字だにも變ふべからず。

在原業平の清和帝の御宇に渤海使接迎に努めたりしこと實錄に明かなれども、このことやがてかの中將の必ず才學有りし證しにせむはいまだ考へたらざるにいたり。三大實錄によるに、この時の渤海國入覲使楊成規等、貞觀十三年十二月十一日にはや加賀國に着きぬたりけれども、いかなるゆゑにやありけむかしに長く留りて京師に到りやがて鴻臚館に入りしは明くる年の五月のことなりけり。この月の末つ方になりてぞやうやう歸路に就きしなるべし。この使節の來京につきて不祥のことたえてなかりしにもあらざりけれども、百人に餘れる蕃客の送迎と宴饗と、これまた盛代の儀典といはではあるべき。かたみに敬讓と和悅のありしこと、國史の記事にてそのいみじかりしさ思ひ偲ぶるにたへたり。蕃客の數いと多かりしかば、應接に與りし人またおのづからあまたにて、ここにただかたはしばかりをあげ言はむに、美努清名と大春日目安と存問渤海使となり、都良香と平季長と掌渤海使となり、また多治守善と菅原惟肖と領歸渤海使に充てられしこと實錄に記せり。ほかに大江音人、藤原佐世、橘廣相をはじめて才藝の名に立てりし人々の鴻臚館にて饗應に當りしこと同じ實錄によりて知るをえたり。これらの人々と外使と詩賦の贈答のなくてやみぬべきいはれあるべからず。橘廣相と高階令範の遣はされて外使と曲宴ありし時、客主具醉、興成賦詩とぞ貞觀十四年五月二十五日の條には記されたる。

今井源衛博士の在原業平評傳、在中將につきてくさぐさのことを述べていと詳かなればこの中將の渤海使應對のさまを知らむにもきたよりあり。同じ博士、貞觀十四年に業平と並びて外使接迎に充てられしは、そもいかなる人々なりしや、國史の記載によりてえ及ぶかぎり尋ね明められしかども、それによるにこれらの人々司位こそさまざまなりしか、おほかた才學にまれ容貌にまれ蕃客を譽め驚かしむるにたるひとかどを具へぬたりしことおろおろ知らるるにいたり。

この年の外使來朝のこと、在原業平がむねと接客を掌りしにはあらで、ただいとあまたなりし接客員數の内に入りたりしにすぎざることげに言はでもしるかるべし。國史をけみするに、業平の鴻臚館に向ひて渤海使を勞問せしこと、三代實錄貞觀十四年五月十七日の條のほかには見えず。客徒に時服を賜へることこの條に記せれど、同じをりに詩賦贈答まではなかりけむかしとぞおぼゆる。

同じ月の二十五日に鴻臚館に渤海使を訪ひし藤原良近なる人あり。三大實錄貞觀十七年九月九日の條に載れるこの良近の卒傳には、容儀可觀、風望清美、雖無學術、以政理見推と云へれば、この人の鴻臚館に遣されしは漢才ありしゆゑならで吏務に長けたりしがゆゑなること誤りなかるべし。この卒傳にまた良近の爲人強力にしてその膂力過人たることさへつづさに説きたり。雖無學術の四字、業平につきて云へる略無才學の一句とさも似たれば、これによりて漢才なしといへども外使應接に妨げなかりしことのおのづから知らるれば、略無才學を略有才學に改むまじきこといよいよ明けきなり。されば在原業平が渤海使勞問に遣されしことむねとその體貌閑麗たりしがためなるべし。

かほかたちよきみやびをを指して、在五中將によそへつつ、今業平と呼ぶは下れる世の習ひにすぎざれば、ここに言ふにもたらざるめれども、業平朝臣のげに體貌閑麗たりしことのあやまりなきは、實錄に載れる卒傳より知らるるなり。三大實錄の奏進せられし延喜元年は業平朝臣の卒去せし元慶四年より距れることおほよそ二十年にすぎざれば、この頃かの朝臣のかほすがたをうつつに見知れる人なほ多く世にありしこと疑ふべきにあらず。

また渤海使宴應送迎のことに充てられし朝臣あまたありしなかに、爲人長大、容儀可觀と記されたる直道氏守なる人ありたり。これ狛人の裔にして、渤海人もと高句麗人の餘類にほかならざれば、この氏守また蕃客にいささか因みあるにいたり。さればことに才學ありたりとも見えねども接客に遣されしにやありけむ。在原業平の鴻臚館にて接迎のこと務めえたるは、平城の帝の孫王なれば出生尊貴にしてしかも體貌閑麗たりしがためなるべし。かれは丈長くををしき歸化人たりし氏守、これはあてにみやびたる皇胤たりし業平なれば、好一對と言はむはいかがしきふしなきにしもあらざれども、その頃の公にて外使接遇の人を選ぶにいとねもころに心用ゐせられしこと、この二人の同じく鴻臚館に遣はされしにてげによく思ひやらるるなり。

黒川眞頼翁の在原業平朝臣辦さしも詳かならねどこの中將のことひとわたりはよくあげつらへりと言ふべし。業平の才學につきて黒川翁の云へらく、三大實錄に略無才學といへるは、和歌を善く作るに比べては才學薄しといふなり、才學とは漢學をいふ、清和天皇の貞觀十四年に、鴻臚館に向ひて渤海の客を勞問したることあるにても無才ならぬことは知るべしと。黒川翁の説きしおもむき半ばかりはあたれりと言ひつべけれども、渤海使勞問に與りしは才學ゆゑにはあらざりけむことわがすでにつぶさに述べしがごとし。され業平朝臣に才學かつて無かりしにもあらじ。黒川翁の思はれしごとく、かの朝臣の世にならびなき大和歌にむかへたらましかばその漢才の方はをさをさとるにたらざりしならまし。略無才學の略の一字よくよく心をつけて見るべし。

（平成二十九年五月二十三日受附）